

新型コロナウイルス感染症流行下での授業実践と感染症対策

白 神 聖 也

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

新型コロナウイルス感染症の流行により、大学の授業も学生生活も大きな影響を受け、オンライン授業の実施を余儀なくされた。本学部では周辺の感染状況により授業レベルを決め、ロイノート・スクールを主にしてZoomで補う形でオンライン授業を実施した。オンライン授業では一方的になりがちで内容が薄くなり、対話が少なくなるとともに質問がしにくく、また通信が途切れやすい。身体症状としては眼が疲れやすくなるなどの欠点があった。理科教育関係では特に観察・実験などは非常に困難となった。

オンライン授業による授業方法は、感染症が収束しても利用可能なものもあり、大学教育に限らず学校教育全体ではICT教育の推進の加速化につながった。復習での利用や不登校生徒、病弱児童などへの対応も可能となった。感染症対策については最初は手探りであったが、当初に比べ何が有効で何が無意味であるかもわかってきており、科学的な知見を基にした改善の余地がある。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、オンライン授業、大学教育、感染症対策

I. はじめに

中国武漢から始まり、日本では令和2年2月に横浜港に着岸したダイヤモンド・プリンセス号内での乗客の感染者増加に端を発した、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大に伴い、安倍晋三総理大臣（当時）は令和2年2月27日に、全国すべての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校について、3月2日から春休みまで臨時休業を行うよう要請した。本学でも文部科学省通知および4月7日に全国に発令された緊急事態宣言に伴い、令和2年度新学期当初から休講とし、5月11日からのオンライン授業の開始を決めて、その通信設備の充実、教材配信通信会社との契約、オンライン授業コンテンツの作成などの準備にあたった。新型コロナウイルス感染症は、5回の感染者増加の波を経て、令和3年の年末を迎えようとしている。感染者数が最多となったのは、令和3年8月～9月のデルタ株による第5波であった。

本稿では、主に筆者が受け持った2年間のオンライン授業の実践と課題を書き出し、本学部での感染症対策の実際について記述し、後の時代に生かされるように記録することとする。

II. オンライン授業の実践

本学部では、2年間にわたり緊急事態宣言、まん延防止等重点措置、広島県感染拡大防

止集中対策発令や広島県の感染者情報を鑑み、授業レベルを決定し、オンライン授業のみの期間と対面授業（文部科学省用語は面接授業）を主とした期間を繰り返した。オンライン授業で使用したツールは、「ロイロノート・スクール」（以下、ロイロノートと略す）と「Zoom（Zoomミーティング）」である。本学では、通信機器や通信環境が整っていない学生もいることを考え、学生あたり一律5万円の臨時奨学金の給付を行った。

筆者の担当授業は、「初等理科」、「初等理科教育法」、「子どもと環境」、「総合的な学習構成論（総合的な学習の時間指導法）」、「キャリア教育Ⅳ」、「特別研究」、「卒業研究」であった。

理科関係は、どうしても画像や図表が必要な場合が多かった。ロイロノートを使用する場合も写真を撮って画像を取り込んだり、スライドショー（Power Point）を作成してMP4に変換して分断したりして使用した。しかし、音声を入れると学生の家庭の通信環境によっては途中で動かなくなったりしたので、途中からは音声入りはあきらめ、理科関係以外の授業についても音声なしに切り替えた。

したがって、途中からは音声が必要な場合はZoomを使用した。最初は本学部の通信回線も細く、Zoomでの授業実施時間は限定された。令和3年度後期からは、授業の最初と最後はZoomを使用することができたが時として不具合もあった。少人数のゼミの場合は、LINEのビデオ機能の利用もした。また、筆者が担当する授業の野外実習（フィールドワーク）は感染状況をにらみ、感染対策をした上で実施した。

ロイロノートでは、出席カードと課題カードを提出するようにして、ほとんど毎回課題を用意した。学生は各自で課題をこなし、システム内の提出箱にドラッグして入れた。出席カードは原則としてその日の23:59まで、課題カードは授業の3日後を〆切とした。学生の授業出席率は令和元年度までと比べてよかったが、課題提出の方は他の授業もあることから、提出が遅れたり、提出できなかったりした学生が出てきた。

オンデマンド型のロイロノートのみの授業は、次第に授業時間内の受講者が減ってきた。いつでも視聴できるからである。一方、Zoomの授業は学生どうしが顔を確認できることもあり、学生の笑顔や双方向での授業の活性化が見られた。ただし、顔出しや音声は回線の分断や不安定化をもたらすので、学生側のカメラはOFFにさせ、音声について発言者以外はミュートにさせた。なお、クリップボードを使用することは可能だったが、黒板全体をきれいに映し出すことは不可能だった。

なお、オンライン授業受講上の注意点として、次の点を最初に学生に示した。

1. Zoomユーザー名は、本名にする。
2. 画像を録画・録音しない（教員の許可があればいい）。
3. スクリーンショットしてSNSなどで不特定多数に流さない。
4. ロイロノートの内容は学外の他人に渡さない。

対面授業をする場合も、マスク着用で前後左右に間隔を取って座らせ、窓やドアは開けて風を通すようにした。館内に入る際には、アルコール消毒してサーモグラフィー（サー

モカメラ)で検温させ、教室の出入りの際は手指をアルコール消毒させた。当初は、授業後にアルコール入り消毒液で机上の消毒もさせた。理科実験室は四角い対面型の机であるので、アクリル板(パーティション)を間に1枚置いたが、観察・実験の際はどうしてもアクリル板を取るしかなかった。

令和2年度は授業開始が遅れたため、前期の終了が8月半ばとなり、定期試験もなしとなった。

なお、令和3年7月から本学ではモデルナ製のワクチンの職域接種(教職員、学生の希望者制で2回実施)が実施されたことを附記しておく。ただし、高齢者、準高齢者は先に地方自治体のファイザー製のワクチンを接種した者もいる。

Ⅲ. オンライン授業の利点と課題

対面授業とオンライン授業を比較しての本学部学生へのアンケート(令和2年12月)では、対面授業支持が多かったが、オンライン授業支持か併用がよいとする者も思ったより多かった。

新入学生は、特に最初はオンライン授業の受け方もわからず、大学での新たな友人とも話せず、特に親元を離れて生活を始めたものは孤独感など不安を抱えていた。やがては、同級生どうしてスマートフォンなどを利用して情報交換できるようになっていたが、課題の答えを教え合うようなこともうかがえた。

オンライン授業では、大学への交通費はかからず通学時間もかからない。長く期間が続く場合はアパート生活の学生は自宅での受講も可能であった。また、ロイロノートのみの授業の場合は早起きする必要がないこともオンライン授業が支持された理由である。復習のしやすさも支持の理由に挙げられていた。パワーポイントなどの授業資料も通常の教室の授業であると席によっては見えにくい、近くで見ることができる。そして、オンライン授業の良さとしては何より自分や家族への感染リスクが少ないことが挙げられていた。

全国的にも問題となったが、オンライン授業では一日中画面を見ることで眼が疲れ、同じ姿勢であるので肩こり、頭痛などを訴える学生も出てきた。課題の多さに辟易とする学生や能力的に多くの課題をこなしきれない学生も出た。学力不足の学生にとっては理解が困難な授業もあり、ついていけない場合なども散見され、学力差は広がった。教師の指示の不明確さを挙げている学生もいた。生活リズムが乱れた学生もいた。Zoomでは、たびたび途切れることや音が聞き取りにくいことが難点として挙げられていた。オンライン授業だけのせいではなく、緊急事態宣言による外出控えのせいであるが、体力の衰えを感じる学生もいた。授業の途中で休憩を入れることは最初から意識した。課題がたまと消化できないことから〆切期日も早くした。

学生にとっては本来のキャンパスライフにはほど遠く、サークル活動や大学祭などの行事もできず、特に新入学生には辛い時期だったと思う。大学で友達と顔を合わせ話ができることが彼らの喜びの一番である。オンライン授業だけでは学習集団づくりは不可能であ

る。

オンライン授業では授業が教師側からの一方通行になりやすく、質問がしにくいなどの点があり、その点は令和3年に文部科学省からも全国の大学向けに、オンライン授業の場合は授業の最後に質問を受け付けるように通知があった。また、本学でも2年目（令和3年度）には、その授業の時間中に受講することができるように最初と最後にはZoomを使うなどの工夫をし、各課題も軽くした。対面授業のみだけの時代に比べると、内容が薄くならざるを得ず、本来の授業でつけることができる能力には届かないように感じた。理科関係の授業は特に観察・実験などに困った。実際の植物などは撮影して画像を取り込んだ。大切な観察・実験や野外実習は、対面授業ができる時期に実施した。

しかし、今回のような新形態の授業ができることがわかったので、欠席者も再受講することが容易となり、一般の高等学校や中学校などでも不登校の生徒への対応が可能となった（不登校生徒の場合は、オンラインでの受講で出席とする学校が増えた）。大学でも新型コロナウイルス感染症が収束したときにも対面授業とオンライン授業とをうまく組み合わせる授業をすることが可能となった。大学によっては、大人数授業のときには人と人との間隔を取る上でもその重要性はあったようだ。しかし、観察・実験、模擬授業や卒業研究指導などは対面での指導しか難しいのもたしかである。

オンライン授業はコンテンツ作成に膨大な時間と労力を要するが、一度作成すると次の年にも修正して再利用できる良さもある。

IV. 本学部の感染症対策と他大学との比較

1. 本学部の感染症対策

本学部での授業レベル1（原則対面授業）での感染症対策は次の通りである

（1）平素からの感染防止の基本

- 周囲の人との距離を取る（ソーシャル・ディスタンス）
- マスクの着用
- 手洗いと消毒
- 3つの密（密閉空間・密集場所・密接場面）の回避
- 部屋の換気をこまめにする
- 間近での会話、密接になる行動を避ける
- 他の都道府県への移動については、当該地域の最新の感染状況や都道府県が出す情報などに十分留意の上、リスクが高いと判断される地域への移動を控えさせる

（2）登校について

- 自宅で毎朝検温させ37.5℃以上の発熱がある場合、咳や息苦しさ、味覚や嗅覚等の変化に気づいた場合は、無理をせずに欠席させる
- 通学にあたっては、混雑する時間帯をできる限り避け、車内ではマスクを着用して周囲の人との距離を取る、会話を控えるなどの対策をとらせる
- PCR陽性や保健所から濃厚接触者の認定を受けた場合は欠席させる

（3）入構時の対応

- 自宅で毎朝検温した結果や症状を健康観察票に記入させ登校する際に持参させて、入構

時に教員がチェックする（また、2週間に一度回収する）

- 入館時には、玄関にある消毒液で手指をアルコール消毒させる
- 玄関入口で、非接触式体温計による体温測定をさせる
- 学内では、必ずマスクを着用させる（不織布マスク推奨）
- 入構したら、エレベータは使用せず、事務室側（道路側）階段を使用して授業のある教室に移動し、東側の階段は上り、西側の階段を下りとして使用させる

（４）授業を受講する際の留意点

- 窓と廊下側の扉を開けて、空調も含め常に換気をする
暑さや冷えの対策を取れるよう、服装を工夫させる
- 机1台につき1人が着席することを基本とし、座席指定として密集しないようにする
一番前を空けて教員との距離をとる
- できるだけ「密」を避けて大講義室・中講義室を利用し、教室間の移動がないようにさせる
- 教室への入退室時には、手洗いまたは消毒を行う
- 授業終了後に、掃除用消毒液で自分の使用した机と椅子を拭くことを原則とする
次の授業に移動するため時間がない場合は、その日最後の講義終了の際に消毒する

（５）昼食について

- 基本的に、授業を行った教室の指定された座席かラウンジで昼食をとらせる
食堂は閉鎖する
- 食事をする際には、ていねいに手洗いをさせる
食事中はマスクを外しているため、お互いに距離をとり、向き合う位置にならないように注意し、黙食とする
- 食後の片づけの際、自分が使った場所を掃除用消毒液で消毒させる

（６）その他

- 授業が終わったら、学内にとどまらずに速やかに帰宅させる
- 更衣室（ロッカールーム）は狭く密接するので使用不可にする
- 体育館やグラウンドは、授業時のみ使用させる

２．他大学との比較

（１）他大学の状況を教員に質問した結果

次の大学の感染対策状況を大学の教員に質問した結果をまとめる。

広島大学、安田女子大学、広島文教大学、比治山大学、広島経済大学、県立広島大学（宇品、三原）、広島県立叡啓大学、広島工業大学、福山市立大学、山口東京理科大学、島根大学、愛媛大学、高知大学、大分大学、長崎大学、宮崎大学、神戸大学、神戸親和女子大学、京都女子大学、北陸先端科学技術大学院大学、東京都立大学、東京大学、東京外国語大学、電気通信大学

①棟の入口（玄関）で教員が立ってトリアージをしているかどうか？

→ サーモグラフィー、アルコール消毒液はあるが、全て教職員は立っていなかった。

②授業後に机上をアルコール消毒しているかどうか？

→ 授業の最後に行う大学が約2/3であった。

③学生にエレベータを使用させているかどうか？

→ 使用可の大学がほとんどで、人数制限をかけている大学もあった。

④更衣室（ロッカールーム）を学生に使用させているかどうか？

→ ほとんどの大学が使用させている。学生に自主的に制限をかけさせて、ソーシャル・ディスタンスを保って使用させ、人数制限をしている大学もあった。

⑤階段の一方通行をさせているかどうか？

→ 一方通行ではない大学ばかりであった。

⑥食堂は、どのような形で学生に使用させているか？

→ 間隔を取り、アクリル板をして、「黙食」の掲示や放送をして使用させていた。

（2）他大学の状況も鑑みた上での考察

教員による玄関でのトリアージは不要であるように思う。また、このウイルスの性質から次亜塩素酸系よりアルコールによる消毒が有効であるが、最後の授業から次の日までの時間までには特殊な状態でない限りは机上のウイルスは活性を失うので、アルコール消毒はまずは不要であると思われる。エレベータ内で感染した例もないし、エレベータは常に自動換気されており、止まった階で扉が開き空気も入れ替わる。また、更衣室も自動換気がされているのでマスクをして更衣するだけなら問題ない。最も注意を払うべきところは、マスクなしの昼食時であり、特にそのときの会話は危険である。本学では、「黙食」の掲示と食事後にアルコール消毒液で拭き取ることを習慣づけした。

令和3年11月1日には、本学は広島県ならびに全国的な感染者数の減少を鑑み、図書館の開館、食堂再開（アクリル板あり）、サークル活動の再開（許可制）を決めた。また、階段の一方通行も廃止した。令和3年12月1日には、学生の更衣室とエレベータ利用についてルールを設けた上で使用可能とした。

V. おわりに

新型コロナウイルス感染症の流行は令和3年末の段階ではまだ続いており、ワクチンの供給、医療態勢の拡充、治療薬の開発などが我が国の課題であるが、有効な治療薬ができ次第、変異株が生じて社会も教育も元に戻ると思われる。今回のパンデミックは日本社会全体も大きく揺るがし、大学教育や大学生活にも大きな影響をもたらしたが、その中で得るものもあり、オンライン授業による授業方法は感染症が収束しても活用可能なものもある。従前の対面授業がすべていいというわけでもなく、オンライン授業の効率の良さもあり、オンライン授業が向いている学生もいることはたしかである。ただ、オンライン授業の学生への課題負荷に関しては、教員間の調整が必要である。また、教員の技術的な部分の研修

や大学の配信環境の整備は必要不可欠である。対面授業では、感染状況下で間隔をとっての授業となると教室の広さも問題となる。

令和3年11月14日付の日本経済新聞によると、京都大学は10月22日から対面授業を開始したほか、北海道大学、東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学、神戸大学もオンラインと対面授業の併用になった。また、上智大学、大阪大学、立命館大学、近畿大学も対面中心の授業になったが、これらの大学も全面的な対面授業に切り替えてはいない。本学もまた対面中心であり、全面的な対面授業（レベル0）にはなっていない。大人数の講義は間隔を取るのが困難である一方、本学でいうならば理科の実験、体育実技、ピアノ技法、図画工作、調理実習などは対面でないと難しい。早稲田大学が令和2年8月に学生に実施したアンケートでは、感染リスクがなくなった後のオンライン授業の割合について36%もの学生が「授業の4割以上」を希望した。自宅で学習できる点や復習しやすい点をメリットとして感じていた。大学は今後もデジタル技術を活用して、より効果的な授業形態を創り出すことになる。

大学教育に限らず学校教育全体でもICT教育の推進の加速化につながった。また、遠隔地に住む非常勤講師の活用も可能となった。小学校、中学校、高等学校においても復習や欠席時の授業の再履修での利用や不登校生徒・児童、保健室登校の生徒・児童、病弱児童などへの学習対応が可能となり出席日数とカウントできるようになった。ロイロノートは、特に小学校、中学校、高等学校で利用しやすいように思った。大学ではこれから特に通信制大学が増えるかもしれないし、一般の通学制の大学でも一般教養課程（リベラルアーツ）の同じ内容の授業科目については近隣の大学が協力して一人の教員が受け持つことも可能となるかもしれない。単位互換授業でも利用できる。

感染症対策については、最初は手探りであったが、新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）の性質もわかってきた。例えば、初めは電車の吊り輪や机の上、廊下の床の上、手すり、硬貨や紙幣なども危険と言われていたが、一般的にはそういう場所からの感染の可能性は低い。感染させるだけのウイルス数は存在しないし、皮膚からウイルスを口に運ぶこともない。大学での感染経路は主に飛沫感染で次に空気感染（エアロゾル）である。当初は危険と言われていた、ジェットタオル（ハンドドライヤー）も手洗いた後なら使用してもウイルスが飛散する可能性は極めて低い。ウイルスはふつう生物には分類されず、細胞に寄生していない状態なら数時間後には活性を失う。通風・換気がなく、マスクなしで発声をする密閉空間や身体接触を伴う部活動、本学構内にはないが寮生活空間、学外ではカラオケボックスのような発声する閉鎖空間はこれからも危険である。文部科学省は、全国の学校に対し、特に発声を伴う音楽、体育、理科の実験などに注意を喚起していた。なお、広島県・広島市教員採用試験でも、歌唱・リコーダーや体育実技による試験は令和2年から2年間中止された。

令和3年9月30日付の文部科学省通知「令和3年度後期の大学等における授業の実施と新型コロナウイルス感染症への対策等に係る留意事項について（周知）」（抜粋）を引用す

る。

「新型コロナウイルス感染症の影響の下にあっても、高等教育機関においては学生の学修機会の確保と感染対策の徹底の両立を図ることが重要であり、各大学等が学生に寄り添い、学生が安心し、また十分納得した形で学修できるような対応を講じていただきたいと考えています。各大学等におかれては、本通知やこれまでに告示している上記の通知等の趣旨に御留意いただき、十分な感染対策を講じた上での面接授業の実施など学修者本位の教育活動の実施と、新型コロナウイルス感染症の拡大防止に向けた取組に努めていただくよう、改めてお願いします。」

「大学等の教育において、豊かな人間性を涵養するためには、直接の対面による学生どうしや学生と教職員の間の人的な交流が行われること等も重要な要素です。令和3年度後期の授業においても、3月通知をはじめとして、これまで文部科学省において告示してきた授業の実施と感染対策に関する留意事項や好事例を参照いただき、改めて、学生が安心し、納得する形で学生生活を送ることができるよう、十分な感染対策を講じた上での面接授業の適切な実施や学内施設の利用機会の確保をはじめ、学生の学修機会や環境の確保のために必要な取組をお願いします。」

マスクをして換気がなされている場合は何の問題もなく、手に着いても石鹸でよく洗えばいいだけである。ウイルスは生物に分類されず細胞よりかなり小さく、細胞内に寄生することのみによって活性を保ち代謝と増殖をするが、単独で存在する場合は単なる物質の集合でありやがて分解する。アルコール（70～80%が望ましい）は、コロナウイルスの脂質の膜を壊し不活性化する。あるいは、70℃以上に加熱することでコロナウイルスの周囲のタンパク質は変性し、ただの物質の断片となる。なお、中の遺伝物質である核酸（RNA）も100℃なら確実に分解される。次には次亜塩素酸系の溶液が有効である。洗剤の中には界面活性剤があるので、洗濯機で洗濯すれば衣類も問題なくなる。

コロナウイルスの性質を科学的に知り正しい感染症対策をとれば、極端に恐れる必要はない。無駄なコストと労力はかけるべきではなく、焦点を絞った有効な感染対策を取るべきであろう。ゼロリスクはあり得ない。デマに惑わされず、各自が情報を集め比較し、その中でエビデンスのある確実に詳細な情報を選択した上で、自らが直接確かめられなくても今までの知識の中から自分で科学的に判断できる能力を培うことは重要である。

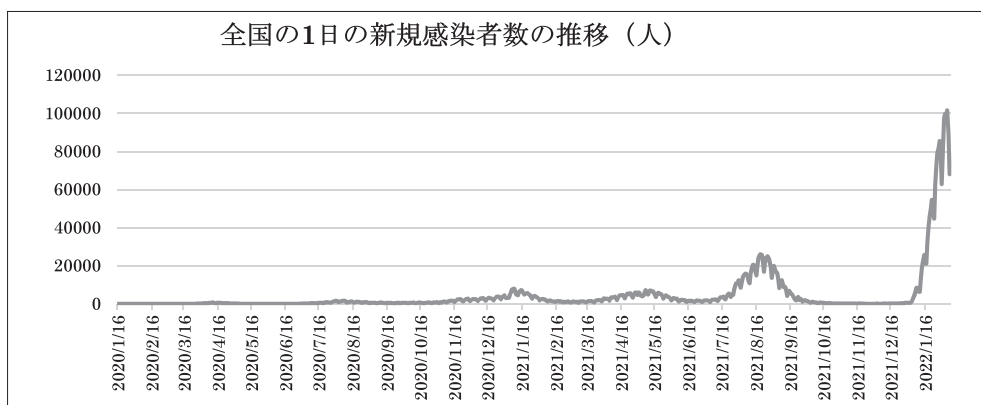
主要参考・引用文献

- 1) 本学部生へのアンケート結果、本学イントラネットフォルダ、2020年12月（アンケート起草 白神聖也）、2021-11-12アクセス。
- 2) 文部科学省、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況、2020。
- 3) 渡辺智博・墨野倉伸彦、「高等学校の理科並びに大学の理科教育法のオンライン授業の実践録」、教職研究第35号（臨時増刊）、立教大学、2021。
- 4) 加納寛子、「コロナ禍における高等教育でのオンライン授業の可能性について～学生のオンライン授業のための通信環境とICT機器の所有状況に関する調査より～」、日本科学教育学会第44回年会論文集、

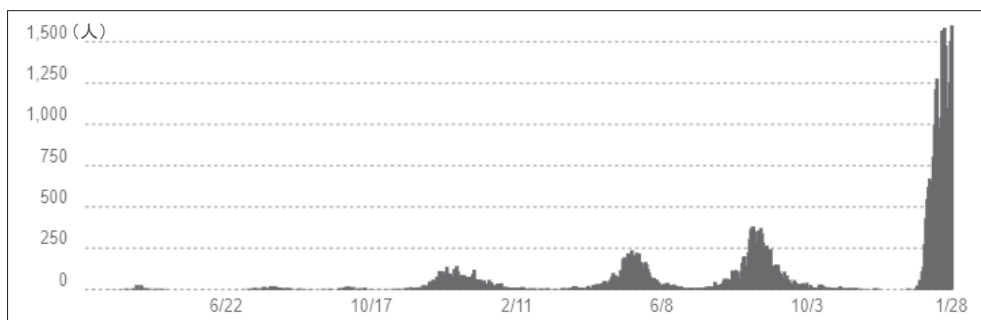
日本科学教育学会，2020。

- 5) 仲井勝巳，「コロナ禍の授業を乗り越える」，理科の教育，Vol.70，No.828，pp.36-37，東洋館出版社，2021。
- 6) 林壮一，「Covid-19と戦うために創り出し続ける「新しい学修様式」」，理科の教育，Vol.70，No.828，pp.38-39，東洋館出版社，2021。
- 7) 峰宗太郎，「しっかりわかるワクチンと免疫の基礎知識」，池田書店，2021。
- 8) 西村秀一，「もうだまされない新型コロナの大誤解」，幻冬舎，2021。
- 9) 堀成美，「やりすぎだらけの感染対策」，文藝春秋，第98巻，第11号，pp.244-251，2020。
- 10) 文部科学省通知（各国公立大学法人，学校法人理事長宛 令和3年9月30日付），「令和3年度後期の大学等における授業の実施と新型コロナウイルス感染症への対策等に係る留意事項について」，2021。
- 11) 朝日新聞DIGITAL，「オンライン授業「カメラをオンに」応じた学生は1%」，asahi.com.，2021年5月17日配信，<https://digital.asahi.com/articles/ASP5F4W7ZP5CUSPT00L.html?pn=8&unlock=1#continuehere>，2021-11-21アクセス。
- 12) 朝日新聞DIGITAL，「コロナ下，大学生を苦しめた「課題地獄」どうなった？」，asahi.com.，2021年11月12日配信，<https://digital.asahi.com/articles/ASPC5QKBPBWUSPT00J.html?fbclid=IwAR0DZ0QzZ1JvHJYFM4-0oSbPLWyA0FxmAzqh3UmIJXFQ5gB2QM1VKGvDCow>，2021-11-21アクセス。
- 13) 日本経済新聞，「大学授業すべて対面遠く～接種進むが冬場控え慎重」，日本経済新聞令和3年11月14日付。

<参考1> 全国の1日あたりのCOVID-19の新規感染者（データ提供：NHK）



<参考2> 広島県のCOVID-19の新規感染者数（データ提供：JX通信社/FASTALERT）



令和3年11月18日発表の新規感染者数は、全国で163人（広島県1人、東京都20人）まで減った。11月25日時点では、全国の新規感染者数は119名である。12月17日には、広島県内の医療機関と宿泊施設での療養者は0人となった。広島県の新規感染者数は12月21日段階で21日間0人であった。

なお、11月24日に南アフリカからWHOへ報告されたオミクロン変異株は感染しやすいとされ、12月22日には日本で初めて大阪（25日には広島市）において市中感染が確認された。令和4年1月28日には広島県の新規感染者数は過去最多の1599人（広島市は876人）となり、オミクロン株感染者の割合が100%に近づいている。令和3年10月1日から、本学部は「レベル1」にしたが、オミクロン株の感染者急増と広島県の「まん延防止等重点措置」の発令により、令和4年1月12日から再び「レベル2」となった。ワクチン接種率は令和3年11月時点で約77%であるが、ワクチン2回を接種しても感染した例が増えていく。

<別表> 広島都市学園大学における新型コロナウイルス感染拡大防止のための行動指針

レベル	学生の入構	授業			教員の研究活動	課外活動
		(講義)	(演習)	(実習・実技等)	(学生への研究指導)	
0	通常の活動（ただし、「新たな生活様式」を踏まえたものとする）					
1	要許可（受講・研究活動・特に許可された課外活動以外禁止）	原則として対面授業（ただし、3密を避けて実施）			通常通り （遠隔指導が困難と教員が判断した場合のみ学内で指導）	原則禁止（活動を避けがたい場合も、要許可）
2	要許可（受講・研究活動・特に許可された課外活動以外禁止）	非対面授業 （ただし、対面授業実施を避けがたいものは3密を避けて実施）	原則として非対面授業 （ただし、資格取得等に係り、対面授業実施を避けがたいものは3密を避けて実施）		通常通り （遠隔指導が困難と教員が判断した場合のみ学内で指導）	原則禁止（活動を避けがたい場合も、要許可）
3	原則禁止（受講・研究活動で特に許可された以外禁止）	非対面授業			通常通り（ただし、在宅勤務等を含む）	禁 止
		（ただし書きなし）	（ただし、オンライン授業では対応が困難な実践的な内容に限り対面授業等を実施。）	（ただし、施設の受入れ状況により、実施、延期または代替授業。）	（遠隔指導）	
4	禁 止	非対面授業			入室が不可避な研究に限り可 （遠隔指導）	禁 止
5	禁 止	非対面授業			入室が不可避な研究に限り可 （遠隔指導）	禁 止